

カテゴリー構成の新たな問題圏

—— コミュニケーションの連鎖との関連で ——

田 村 美 恵

A new look at category construction in relation to communication chain.

TAMURA Mie

1. 「先取りされた表象」へ向かうカテゴリー構成 (category construction)

(1) 自然カテゴリーにおけるカテゴリー化 (categorization)¹⁾

環境世界に生起する膨大な諸事物を「意味のあるまとまり」として捉えるやり方は、無限に存在しうる。にもかかわらず、なぜ、われわれは、(別のやり方ではなく) 今現に行っているようなやり方でカテゴリー化を行っているのか—カテゴリー化の基本原則に関する命題は、これまで、一般に、このような問いかけを出発点としてきた (e. g., Rosch, Mervis, Gray, Johnson & Boyes-Braem, 1976)。そして、その答えは、われわれの内に既に形成されている、最も自然 (natural) な分類形態である「自然カテゴリー」の構造的特徴を分析することで導き出されると考えられた (e. g., Rosch et al., 1976; Rosch & Mervis, 1975)。

自然カテゴリーとは、環境内の具体的な事物を分類しているカテゴリーであり、われわれが日常的に使用する辞書的、語彙的 (lexical) な概念とも密接に関連している (Medin & Wattenmaker, 1987)。例えば、〈家具〉というカテゴリーには、椅子、机、ベッドなどが属し、〈乗り物〉というカテゴリーには、乗用車、トラック、バスなどが属するといった類のものである。どのカテゴリーにどのような成員が属するかについては、人々の間で合意が成立しており、一般に、共有知的な (common) カテゴリーであるとされている (Barsalou, 1983)。自然カテゴリーは、十分に確立された (well-established)、最もアクセスされやすい表象である (Barsalou, 1983; 実証的見解は次章で述べる)。それゆえ、新奇な事物の分類は、予め形成されている自然カテゴリーの構造 (分類形態) との照応に基づいて行われると考えられた。つまり、カテゴリー化とは、自然カテゴリーの構造に制約されるかたちで方向づけられおり、無規定的に行われるものではないとされたのである。その結果、カテゴリー化の基本原則を見いだすためには、そのようなカテゴリー化を方向づけるような、自然カテゴリーの構造的特徴を分析することが前提となった (e. g., Rosch et al., 1976; Rosch & Mervis, 1975)。

自然カテゴリーの構造的特徴、及び、カテゴリー化の基本原則については、従来、次のような見解が提出されている。

まず、古典的な見解においては、カテゴリー内のすべての成員は一樣に定義的特性 (defining feature) を共有しており、したがって、成員間でそのカテゴリーへの所属の程度 (典型性) は等しいとされた (e. g., Katz & Postal, 1964)。そして、ある事物がそのカテゴリーに属するか否かという判断は、その事物が定義的特性を持っているか否かに基づくと考えられた。ここでは、カテゴリー化の基本原則は、「定義的特性とのマッチング」であるとされたのである。

しかし、その後、古典の見解に反駁する研究結果が多数報告された (Medin & Smith, 1984 のレビュー参照)。その代表的なものに Rosch ら (e. g., Rosch, 1975; Rosch & Mervis, 1975; Rosch et al., 1976) のプロトタイプ理論がある。プロトタイプ理論では、カテゴリーは、定義的特性の有無によって明確な境界が定められているようなものでなく、特徴的特性 (characteristic feature) の分布をベースとして形成される、より曖昧なものであるとされた (特徴的特性とは、例えば、〈鳥〉というカテゴリーでは、「空を飛ぶ」「さえずる」などが挙げられる)。カテゴリー内では、すべての成員が一樣に共通の特性 (定義的特性) を持つわけではなく、家族同士の似方のように、いくつかの成員同士がいくつかの特徴的特性を共有している (家族的類似性: family resemblance)。そして、特徴的特性を多く有するほど、その成員は典型性が高いと判断される。例えば、〈鳥〉というカテゴリーでは、スズメは最も典型的だが、ペンギンはあまり典型的ではないという具合である。すなわち、カテゴリーへの所属の程度は一樣ではない。

このような構造分析からは、次のようなカテゴリー化のプロセスが導き出された (Rosch, 1975; Rosch & Mervis, 1975; Rosch et al., 1976)。あるカテゴリーに属する事例を経験するにつれて、そのカテゴリーの中心傾向 (central tendency) についての印象が浮かびあがってくる。このようにして見出される中心傾向は、特徴的特性を要約したような表象 (summary representation) であり、これは「プロトタイプ」と称される。どのようなプロトタイプが形成されるかは、特徴的特性の分布の仕方 (家族的類似性の様相) によって規定される。そして、新奇な事物の分類は、このプロトタイプとの類似性に基づいて行われるとした。例えば、クジラが〈動物〉よりも〈魚〉に分類されやすいのは、クジラが〈魚〉のプロトタイプとより多くの特徴的特性を共有するからである、というように説明される。このように、プロトタイプ理論では、カテゴリー化の基本原則は、「プロトタイプとの特性マッチング」であると考えられた。

(2) 「先取りされた表象」としての自然カテゴリー

これらのカテゴリー化は、先述したように、われわれの内に既に形成されている、自然カテゴリーというカテゴリー表象に方向づけられたものである。例えば、マッチングの対象となる定義的特性やプロトタイプは、自然カテゴリーの構造分析から導き出されている。すなわち、カテゴリー化の基本原則は、自然カテゴリーという安定した表象の存在を前提として見いだされているのである。こうしたモデルでは、「カテゴリー化は、自然カテゴリーという表象に向かうプロセスである」と暗黙に仮定されている。そこでは、自然カテゴリーがゴール、すなわち、至るべき終着点として「先取り」され、カテゴリー化は、この「先取りされた表象」に向かう (合致するように進められる) プロセスとして検討されている。ここで描き出されているカテゴリー化とは、自然カテゴリーという表象に規定された固定的、受動的なプロセスでしかない。

しかしながら、カテゴリー化には、自然カテゴリーに規定されることのない、より柔軟で能動

的な側面も存在するのではなかろうか。例えば、“かっぱえびせん、所ジョージ、ウェディングドレス、イースター島のモアイ”，これらは、一つの自然カテゴリーとしては把握され得ない。ところが、〈テレビで見たことのあるもの〉というカテゴリーを構成するとき、われわれは、そこに、「意味のあるまとまり」を見いだすことが可能なのである。

ただし、これまでに述べてきた、自然カテゴリーの構造的特徴や、カテゴリー化の基本原則を否定しようとしているのでは、決してない。本稿の主眼は、自然カテゴリーという「先取りされた表象」に規定され得ない、カテゴリー構成の能動的側面を提示するところにある。

2. カテゴリー構成の柔軟性—ad hoc カテゴリー—

われわれの行うカテゴリー構成が、柔軟性に富んだ、より能動的なものであることを示したものの一つに、Barsalou (1983, 1985) の「ad hoc カテゴリー」がある。彼は、すべてのカテゴリー構成が必ずしも自然カテゴリーに向かうものではないことを強調し、与えられたコンテキスト(文脈)によってさまざまなカテゴリー構成が実現されうること示した。

ad hoc カテゴリーとは、その時々コンテキストに応じて、その都度、ad hoc に(場当たりの)構成されるカテゴリーである。例えば、『火事だ! 避難しろ』というコンテキストのもとでは、〈火事の時に持ち出すもの〉というカテゴリーが、ad hoc に構成される。この ad hoc カテゴリーには、“子ども、貴重品、犬、衣服”などが成員として挙げられる(Barsalou, 1985)。これらの成員が「意味のあるまとまり」を構成することは、自然カテゴリーの分類形態からでは考えられない。自然カテゴリーにあっては別種のカテゴリーに属すべき成員でさえ、ad hoc カテゴリーにあっては、その時々コンテキストに応じて、自由に、その所属を変えうるのである。

ad hoc カテゴリーの特徴は、Barsalou (1983, Exp. 4) の次のような実験において最もよく示されている。彼は、被験者に自然カテゴリーと ad hoc カテゴリーのカテゴリー成員を提示し、カテゴリーラベルを生成させた。その結果、ad hoc カテゴリーのカテゴリーラベルを生成する方が、自然カテゴリーよりも難しいと判断された。このことは、ad hoc カテゴリーが、自然カテゴリーほどはカテゴリーラベルと成員との結びつきが強固ではなく、十分に確立された表象とはいえないことを示している。一方、別の条件として、何らかのコンテキストとともにカテゴリー成員が提示された場合には、先程と異なり、ad hoc カテゴリーのカテゴリーラベルの生成が自然カテゴリーと同じくらい容易になることも示された。例えば、“本、宝石、絵、レコード”という事例が提示されたとする。これらを成員とするカテゴリーラベルを何のコンテキストもなしに生成するのは至難の業であろう。しかし、『太郎君は花子さんと交際しています。もうすぐ、彼女の誕生日です』というコンテキストが与えられた場合には、〈誕生日プレゼント〉というカテゴリーラベルを思いつくのはそう難しいことではない(詳しくは、Barsalou, 1983 参照)。すなわち、ad hoc カテゴリーは、その時々コンテキストに依存したカテゴリーであるといえる。

これまでのことから、次のようなことが言えよう。ad hoc カテゴリーは、その時々コンテキストに応じて、その都度、構成されるカテゴリーであるので、予め確立された表象としては存在していない。しかし、いったんコンテキストが与えられれば、われわれは、そのコンテキストの指し示すゴールに照らし合わせて、自然カテゴリーとは似ても似つかないようなカテゴリーを、

いとも簡単に構成しうるのである。そこでは、ある事物がどのカテゴリーに属するかというカテゴリー / 成員の関係 (所属性) は、コンテキストに応じて柔軟に変化する。例えば、犬は〈動物〉にも〈火事の時に持ち出すもの〉にもなる。自然カテゴリーにおいては、固定的なカテゴリー / 成員の関係が、ad hoc カテゴリーにおいては、ad hoc に変動しうるものとして捉えられるのである。Barsalou は、コンテキストというものを考慮に入れることによって、このような、カテゴリー構成のより柔軟な、能動的な側面を描き出そうとしたのであった。

ここで、「その時々々のコンテキストに応じた ad hoc なカテゴリー構成」という命題自体を否定するつもりはない。問題になるのは、実験操作上、コンテキストとカテゴリー (ラベル)、及びその成員の間に、一方向的な関係しか想定されていないことである。このことは、特に、先述の Barsalou (1983, Exp. 4) において明らかである。まず、何らかのエピソード的な情報 (『太郎君は花子さんと交際しています……』) がコンテキストとして提示される。そして、そのエピソード的な情報のもとにまとまる事例群 (‘本、宝石、絵、レコード’) が ad hoc カテゴリーと見なされ、あるラベル (〈誕生日プレゼント〉) が付与されることになる。ここでは、コンテキストがカテゴリー (ラベル)、及びその事例を決定するという、一方向的な関係しか指定されていない。構成された ad hoc カテゴリーは、与えられたコンテキストに予め方向づけられたものとなっている。言い換えれば、カテゴリー構成に先立って、コンテキストがゴールとして「先取りされている」のである。

しかし、このような一方向的な関係は、果たして妥当なのであろうか。例えば、次のような会話の事例を見てみよう。これは、男女 2 人の大学生 A と B の会話で、B が以前自転車旅行していたときのことに語っている。

〔ケース 1〕

001 A：寝袋とかあるの？

002 B：寝袋とかテントとか いちおーあるけど

003 A：寝袋ってさー けっこー大変だよー 手とか足とか出せないし

004 B：でも夏はテントで寝ればいいし

005 A：手とか足とか束縛されるから あたしダメだわ テントも下が固いしー 腰痛くなる

006 B：夏は虫がでたりするし困るけど 前一回 暴走族が来て 結構近くにいてヤバかった

007 A：へー おっかないねー

008 A：うちは田舎だし結構家に虫とか入ってくる 網戸があっても全然効かないんだよねー

009 B：うちは海近いから虫はあんまりいない

010 A：でも海が近いって、風が強くて大変じゃん？

(この後、各人の帰省先についての話が続く)

ここで起こっていることを検討してみよう。まず、最初に登場する“寝袋、テント”という事例群は、〈自転車旅行に必要なもの〉というカテゴリーを構成している。しかし、003 から 005 へと発話が進行するうちに、“寝袋、テント”は、〈苦手なもの〉というカテゴリーを構成する事例群に変化している。006 で B は、この〈苦手なもの〉に“虫、暴走族”という新たな事例を追加するが、それに続く 008 では、この“虫”が A に〈田舎にまつわるもの〉を連想させることになる。会話のコンテキストは、ここで『自転車旅行』から『田舎』へと移行する。

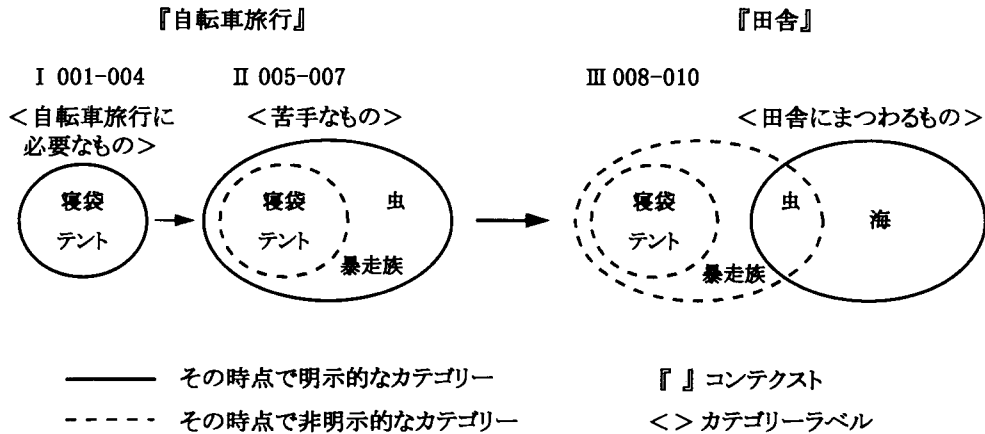


図1 ケース1におけるコンテキスト、カテゴリー（ラベル）、成員の関係

コンテキスト、カテゴリー（ラベル）、成員の関係がどのように変化しているのかを図示したものが図1である（図の作成にあたっては、串田（1994）を参考にした）。ここで行われているカテゴリー構成は、コンテキスト→カテゴリー（ラベル）/成員という方向性では説明できない。例えば、図1のⅢにおいて、『田舎』という新たなコンテキストを生成しているのは、先行発話で提示された“虫”という一つの事例である。そこには、むしろ、成員/カテゴリー（ラベル）→コンテキストという方向性が見いだせるのである。

確かに、Barsalouが行ったような、コンテキスト、カテゴリー（ラベル）、成員という区別を導入することは、カテゴリー構成を説明する上で有効なモデルとなりうる。しかしながら、そこに、ある一定の方向性を措定してしまうことは、われわれの真に柔軟で能動的なカテゴリー構成を、完全には描ききれないことになるのではなかろうか。自然カテゴリーやad hocカテゴリーを対象とした従来のような実験パラダイムに基づく限り、「先取りされた表象」や「先取りされたコンテキスト」に向かうカテゴリー構成しか問題にできない。本稿で新たなパースペクティブとして提示したいのは、「先取りされた表象」、及び「先取りされたコンテキスト」に規定されえない、コミュニケーションの場におけるカテゴリー構成である。

3. コミュニケーションの連鎖とカテゴリー構成

（1）コミュニケーションの連鎖と発話意味の理解

そもそも「コミュニケーションが成立している」というとき、それはどのような事態なのだろうか。ここでは、社会学的な知見に拠りながら論じてみたい。それは、次に述べるような、心理学における従来の情報処理モデル的なコミュニケーションの捉え方に問題を感じるからである。

例えば、シャノンとウィーバー（1949）のモデル（図2）では、コミュニケーションを、送り手から受け手への情報の「伝達」の過程として捉えている。送り手（情報源）が、何らかの意味

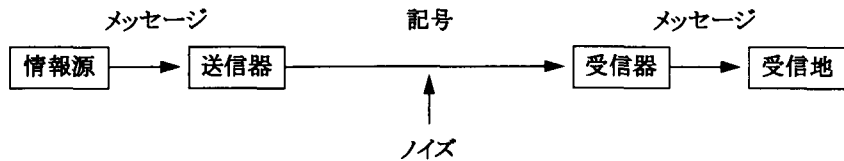


図2 シャノンとウィーバー (1949) のモデル (マクウエールとウィンダール, 1986 参照)

aをもつ情報 A (メッセージ) をある記号に変換し送信する。受け手 (受信地) は、その記号を受信し (記号伝達の過程では多少なりともノイズが介入する)、解読することにより、意味 a を復元する (意味 a')。このようなモデルでは、情報 A は、受け手の応答に関係なく、はじめから意味 a を内包していると仮定される。すなわち、意味 a は、コミュニケーションに先立って「先取りされた意味」として存在する。そして、先取りされた意味 a と、受け手が再構成した意味 a' が一致したところで、コミュニケーションは完成する。逆に言えば、「意味 a = 意味 a'」となることを目指して、コミュニケーションは繰り返されることになる。こうした捉え方は、フルール (1966) やシュラム (1954) のモデルなどにも見受けられる (これらのモデルについては、マクウエールとウィンダール, 1986 を引用)。このように、情報処理モデルにおいては、コミュニケーションという事態を、受け手が「先取りされた意味」を再構成する過程として捉えている。重要なのは、「先取りされた意味」を効率よく正確に伝達・再構成することである。

しかし、このようなモデルは、コミュニケーションという事態を説明するのに、果たして妥当なものであろうか。例えば、A と B が部屋にいたとする。A は、「窓を開けて欲しい」という〈依頼〉の意味で、「暑いですね」と言ったとしよう。それに対して B が、「昨日は台風が通り過ぎましたからね」と応じたならば、B は A の発話を、A の意図に反して〈意見表明〉として受け取ったことになる。この際、情報処理モデルでは、A は B の誤りを効率よく訂正するための発話を行うことしか仮定できない (「そんなつもりで言ったのではない」という具合に)。しかし実際には、A が B への〈依頼〉を諦め、自分で窓を開けながら、「昨日の台風は、戦後、最大級のものだそうですよ」という発話を続けることも可能である。すなわち、情報処理モデルで仮定するようなコミュニケーションは、コミュニケーションの一樣態に過ぎないことが分かる。実際のコミュニケーションでは、送り手の意図 (意味) が「正しく」理解される必要はないのである。

重要なのは、先行する発話に対し、後続する発話によって「理解」が示される、まさにそのことである。後続する発話によって示された「理解」が、先行する発話に込められた意図 (意味) に沿うものであるか否かは、まったく問題ではない。先の例で言えば、A は〈依頼〉の意味で発話① (「暑いですね」) を行った。それに対し B は、後続の発話② (「昨日は台風が……」) によって発話①に対する理解 1 (〈意見表明〉) を示した。A は、理解 1 が、自分の発話①に対する「理解」であるということを確認して、その理解 1 に応じた発話③ (「昨日の台風は……」) を続けることで、発話②に対する理解 2 (〈同意〉) を示すのである。さらに B は、この理解 2 に応じた発話④を行い、理解 3 を示すだろう。このことは図 3 のように表される。すなわち、コミュニケーションでは、後続する発話に示される「理解」を契機とした連鎖が見出されるのである。

このような議論は、近年の社会学的知見と通底するものである (e.g., 馬場, 1990; Luhmann,

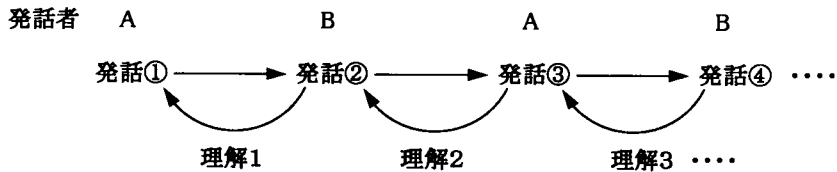


図3 「理解」を契機としたコミュニケーションの連鎖

1984;名部, 1993)。例えば, Luhmann (1984, pp.198-199) は, コミュニケーションが「理解」を契機として連鎖するとし, そのことを次のように述べている。「あるコミュニケーション的行為に次のコミュニケーション的行為が続くとき, そのつど, その先行するコミュニケーションが理解されたかどうかテストされることになる。後続のコミュニケーションがいかに突飛なものであろうとも, それがその先行するコミュニケーションの理解にもとづくものであることを示し・観察するために, それ自身が利用される。……(著者略)……もちろん, 若干の経験にもとづいて, あらかじめ, 理解されることが期待できるような仕方で, みずからのコミュニケーションを行っていくこともできよう。いずれにせよ, 個々のコミュニケーションは, すべて, 後続する諸々のコミュニケーションが引き続き接続していくなかで理解されえ……(著者略)……さもなければ, 個別のコミュニケーションは生起しえないであろう(西阪, 1990 より訳引用)」

すなわち, 個々のコミュニケーションは, 先行する発話に対し, 後続の発話によって「理解」が示されることで, はじめて成立するといえる。さらに敷衍していえば, 個々のコミュニケーションは, 接続するコミュニケーションによって意味が理解され, そのコミュニケーションは, さらに, その後のコミュニケーションによって意味が理解されるという再帰的な連鎖が成立することになる。このことは, コミュニケーションの連鎖において成立する「理解」の様相を示しており, まさに, 「理解」がコミュニケーションの連鎖を生じさせているといえるだろう。

(2) コミュニケーションの場におけるカテゴリー構成

これまで述べてきたことから, コミュニケーションの連鎖の場において, 「理解」が成立するということは, 先行する発話と後続する発話の間で, 一つの「意味のあるまとまり=カテゴリー」が構成されること, と捉えうる²⁾。先行する発話に接続されるために, どのように応答するのが適切(あるいは妥当)なのかは, 先行する発話の内容にある程度方向づけられる。先行発話に対し, 何らかの点で対照をなすような新たな情報を提示することにより, 先行発話と後続発話との間に, 「理解」のための共通の基盤である「カテゴリー」が設定される(串田, 1994を参照)。

こうしたカテゴリー構成は, 発話と発話の接続の場において ad hoc に行われうるものである。一見, 突飛な情報が後続の発話で提示されたとしても, 先行発話との間に, あるカテゴリーを構成しうるならば, その情報は「妥当」なものとして判断され, コミュニケーションは続行される。

このことは, ケース2によって確認されよう。このケースは, 串田(1994, p.123)からの引用である。5人の女子大学生の会話で, デパートでのアルバイト経験について語っているものである。会話中, Bがアルバイト先の「毎日彼女が変わる, ある男子社員」に言及すると, 同じデパートでアルバイト経験のあるCがその男性を知っていることを表明する。ケース2はこれに続く部

分である。なお、本稿では、会話の流れのみを問題にするため、表記を簡略化した。

〔ケース 2〕

001 C：忘れんわーあの人は

002 B：ねえ

003 A：アッハハハハハハハ

004 D：ハハハハ

005 C：すごい変な男の人もおるってうわさやねえ

006 B：うん

007 E：お客さんにもなんかー たらしの 人がおるとかってうわさに聞いたけど

008 A：へーーーーー

009 B：その人

010 E：すぐ来てから若いバイトの子にーうん

011 A：ふーん

012 C：あってもわかるいっつも来てねナイロン袋をいろんな階で集めて帰る人とかもおる

013 E：ハハハハ

014 D：なんでー？

015 C：「すいませーんあのナイロン袋もらえますか」

（この発話の後に、ほぼ全員が笑う）

ここに登場する事例を順に追うと、“毎日彼女が変わる男子社員”“すごい変な男の人”“たらしの人”“ナイロン袋を集めて帰る人”となる。これらの事例は、コミュニケーションの連鎖という文脈以外では、容易に並置されえない。串田（1994）も言うように、とりわけ、なぜ“たらしの人”の後に“ナイロン袋を集めて帰る人”なのだろうか。

まず、005でCは「すごい変な男の人も」と言っている。先行するコミュニケーションで“毎日彼女が変わる男子社員”が提示されていることに照らせば、Cは“すごい変な男の人”を、

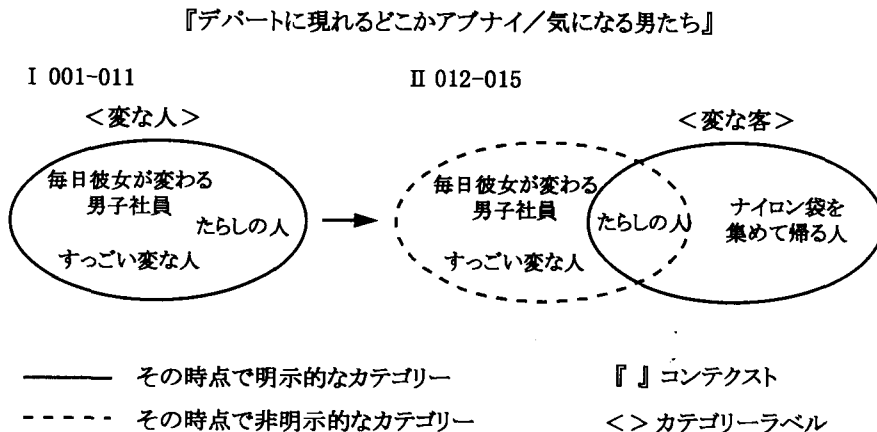


図 4 ケース 2 におけるコンテキスト、カテゴリー（ラベル）、成員の関係

“毎日彼女が変わる男子社員”と並置している、すなわち、同じカテゴリー（〈変な人〉）を構成する成員として提示していると考えられる。その後、007でEは「お客さんにも…たらしの」と言っているが、これは今度は、先行するCの“すごい変な男の人”に並置されている。と同時に、“たらしの人”は「客」でもあり、ここで、〈変な人〉と〈変な客〉という二つのカテゴリーが構成される。012でCは“ナイロン袋を集めて帰る人”という事例を提示するが、これは先行コミュニケーションで構成された〈変な客〉というカテゴリーの成員として位置づけられよう。このように、事例が次々と連続して提示されることにより、結果的には、『デパートに現れるどこかアブナイ／気になる男たち』というコンテキストが見いだされることになる（詳しくは、串田、1994を参照）。以上、コンテキスト、カテゴリー（ラベル）、事例の関係は図4のようになる。たとえば、“たらしの人”の後に“ナイロン袋を集めて帰る人”という突飛な事例が提示されようとも、それがⅡのように、〈変な客〉という一つのカテゴリーを構成する限りにおいては、“ナイロン袋を集めて帰る人”は提示されるべき「妥当」な事例なのである。

このように、コミュニケーションの連鎖においては、個々の事例（情報）は、先行発話に照らし合わせて、その都度、ad hocに提示される。そのようにして提示された事例は、先行する発話との間で同一のカテゴリーを共有することもあれば、後続する発話（事例）との間に新たなカテゴリーを構成するようなこともある。いずれにしても、個々の事例（情報）の位置づけ（意味）は、先行コミュニケーションと後続コミュニケーションとの関係において、その都度、ad hocに決定される。またそれゆえに、その都度、ad hocに修正・解体される可能性をも含んでいる。なぜならば、コミュニケーションはその後も継続的に連鎖していくことが可能であり、その過程で、先行して提示された事例の位置づけ（意味）も変わりうるからである。

もちろん、その場その場で構成されるカテゴリーは、必ずしも恣意的なものではなく、われわれがもっている共有知的なカテゴリー（自然カテゴリー）や、その時々々のコンテキストによって制約を受けるだろう。しかしその中にあるものもなお、コミュニケーションの連鎖の過程で構成されるカテゴリーは、先に述べたように、あくまでもad hocなものであり、また、常に、修正・解体に対して開かれているのである。串田（1994, p.133）は、このことを次のように言い表している。「そこではクラス／メンバー関係が不断に区切りを変えられ、不断に再編成される。それによって、類型的な知識としては区切られているもの同士の、区切りを曖昧化し、別の区切りを設け、次の瞬間にはその区切りをも流動化してしまう」。ここには、「先取りされた表象」や「先取りされたコンテキスト」に向かう受動的、固定的なカテゴリー構成に代わって、柔軟に、能動的にその姿を変貌させていくカテゴリー構成を見いだすことが可能である。本稿において、これまで描き出そうと努めてきた、真に柔軟で、能動的なカテゴリー構成は、コミュニケーションの連鎖の場を新たな問題圏として定位することにより、はじめてその姿を現すことになろう。

4. お わ り に

本稿では、コミュニケーションという事態を、コミュニケーション的行為が再帰的に連鎖する過程として捉え、そこで見いだされるカテゴリー構成の柔軟性、能動性について論じてきた。しかし、これまで述べてきたことは、認識の出発点にしかすぎない。われわれが実際にいかにして、

ad hoc なカテゴリー構成を行っているのか、という問題こそが次に考えられねばならない。これは、そこに生じているプロセスをどのようにして捉えうるのかという方法論的検討を要請する。

例えば、シュグロフとサックス (1995) は、隣接対 (adjacency pairs) というモデルを用いて、会話を分析している。隣接対は、① 2 つの発話からなり、② この 2 つの発話は隣接した位置に置かれ、③ 各々の発話を別々の発話者が生成する、といった特徴を持っている。例えば、「質問—応答」「挨拶—挨拶」「提案—受諾 / 拒否」といった発話のペアがそれに当たる。先行する発話は、後続する発話との関係で類型化される。このような隣接対は、本稿で示したコミュニケーションの捉え方とよく符合するものであり、コミュニケーション連鎖におけるカテゴリー構成の分析に際して、有効なモデルの一つとなろう。しかし当然のことながら、隣接対だけを用いることで、コミュニケーションの全貌が明らかになるわけではない。コミュニケーションの連鎖において、コンテスト・カテゴリー (ラベル)・事例といった要素が、その都度、ad hoc に織りなす関係は、隣接対だけでは捉えきれない。このようなカテゴリー構成の様相を明示しうるような方法が、今後求められるであろう。

注

- 1) 本稿においては、「カテゴリー化」とは、従来のカテゴリー研究で導かれた、「先取りされた表象」に向かう受動的、固定的なプロセスを指し、一方、「カテゴリー構成」とは、より柔軟に能動的に「意味のあるまとまり」を作り出す作用のことをいう。
- 2) より厳密に言えば、実際に、話し手と聞き手との間に、以下に述べるようなカテゴリー構成が行われているかどうかは、確証できない。カテゴリー (構成) は、コミュニケーションの連鎖において「理解」が成立しているときに、事後的に見出されるものに過ぎない。

文 献

- 馬場靖雄 1990 コミュニケーションの「可能性」 ソシオロジ, 107, 59-80.
- Barsalou, L. W. 1983 Ad hoc categories. *Memory & Cognition*, 11, 211-227.
- Barsalou, L. W. 1985 Ideals, central tendency, and frequency of instantiation as determinants of graded structure in categories. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 11, 629-654.
- Katz, J. J., & Postal, P. M. 1964 *An integrated theory of linguistic descriptions*. MIT Press.
- 串田秀也 1994 会話におけるトピック推移の装置系 現代社会理論研究, 4, 119-138.
- Luhmann, N. 1984 *Soziale Systeme*. Suhrkamp.
- マクウェール D. & ウィンダール S. 山名正剛・黒田 勇 (訳) 1986 コミュニケーション・モデルズ—マス・コミ研究のために— 松籟社
- Medin, D. L., & Smith, E. E. 1984 Concepts and concept formation. *Annual Review of Psychology*, 35, 113-138.
- Medin, D. L., & Wattenmaker, W. D. 1987 Family resemblance, coceptual cohesiveness, and category construction. *Cognitive Psychology*, 19, 242-279.
- 名部圭一 1993 〈コミュニケーション過程〉と意味の不確定性 社会学評論, 44, 161-176.
- 西阪 仰 1990 コミュニケーションのパラドックス 土方 透 (編) ルーマン / 来たるべき知 勁草書房 pp.61-87.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. 1975 Family resemblance: Studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology*, 7, 573-605.

- Rosch, E., Mervis, C. B., Gray, W. D., Johnson, D. M., & Boyes-Braem, P. 1976 Basic objects in natural categories.
- シュグロフ E. & サックス H. 北澤 裕・西阪 仰（訳） 1995 会話はどのように終了されるのか 日常性の解剖学 ―知と会話― マルジュ社 pp. 175 – 241. (Schegloff, E., & Sacks, H. 1972 Opening up closings. *Semiotica*, 7, 289 – 327.)

（博士後期課程）